



# 原典「平家物語」を聴く会

平成二十年・夏号

## 音楽で「平家物語」の世界を旅する事ができた 喜多郎さんに聞く

原典「平家物語」のDVDにおいてテーマ曲をご担当いただいている日本が全世界に誇る作曲家でありシンセサイザー奏者の喜多郎さん。現在ライフワークとして取り組んでいる平和への願いを込めた壮大なプロジェクト、四国八十八ヶ所のお寺の鐘の音を使用した音楽で構成したアルバム「空海の旅」シリーズのお話を通して「平家物語」へと繋がる思いを伺った。

まずは「空海の旅」シリーズをスタートしたきっかけを尋ねた。

「二〇〇二年九月、アメリカ同時多発テロの発生時に僕はアメリカ本土へ向かう飛行機の中にいてハワイに緊急着陸する事になったんです。空港に降りホテルに入り、あの貿易センタービルに飛行機が突っ込んでいく所を何度も何度もテレビで見た訳です。その時、音楽家として今自分に何ができるんだ、何か世界平和に貢献で



この「ゆらぎ」の成分を持つ鐘の音によつて一人一人の心が癒され、地球上の様々な地域で起こっている戦争が無くなるきっかけになつてくれれば良いという一念でこのCD制作をスタートしたんです。最終的に全八十八曲、アルバム十枚になる予定で、昨年10月

にリリースした「空海の旅3」(第50回グラミー賞ノミネート作品)には二十四〜三十二番のお寺の鐘を八曲収録しています。アルバムジャケットには二十七番目のお寺の鐘の音のウェーブフォーム波形をデザインしています。が、本当に左右対称のきれいな波形なんです。鐘ごとにその鳴りは違いますが、この美しい波形が「ゆらぎ」のひとつの要因で、聴くものに癒しを与えるのだという事を改めて実感しています」

「諸行無常の響きにすこく奥深いものを

「平家物語」の冒頭において、祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり」と詠われている。諸行無常の響き」というのがその「ゆらぎ」と通ずるものではないでしょうか？

「原典「平家物語」の作曲の依頼を受けた時に、「諸行無常の響き」という部分になると、なぜか僕はすこく奥深いものを感じて、それが「ゆらぎ」と共鳴する感覚なのだと思えます。その奥深いものが時間と空間を超えた旅をしている感じで、テーマ曲を創る事によつて音楽で「平家物語」の世界を旅する事ができたという思いがあります。聴いてくれる方々にも、その思いを感じとっていただけ

とっれいですが」

鐘の音であっても聴く人の心に「声」として響いたと

「平家物語」では祇園精舎の「鐘の音」であり音では無く、それに関し

てはいろいろな学説がありインドの祇園精舎という所はお坊さんが修行をする場、お坊さんの中で死期を迎えた方が入られる無常道という所があり、その回りをお坊さんが読経しながら「鐘」をカンカン叩き回すので、その音を「鐘の音」と言う説もあれば、無常道の四隅に水晶の棒のようなものが風鈴のようにぶら下がっていて、それが風によられて出すチリンチリンという音だという人もいます。喜多郎さんは「鐘の音」からどのよう

な音をイメージされますか？

「鐘の音であつても、人の声、先祖の声と聴く人の心に「声」として響いたのだと思います。実際の音をイメージするといふより、二人一人の人が音を聴き、癒され心の中で手を合わせたりますということが、音ではなく声と表現されている理由ではないかと思えます。どんな音でもそれぞれの心に響く音が、祇園精舎の「鐘の音」なのだと感じます」

世界中の人々に音楽で平和を伝えるべく旅を

「喜多郎さんのプロフィール」

世界的なシンセサイザー奏者であり作曲家。自然環境からインスピレーションを取り入れた独自のクリエイティブな作品は、世界でも高い評価を受け、01年、音楽界最高峰であるグラミー賞受賞、日本人アーティストとして最多ノミネート回数を誇る。現在、平和への願いを込めた壮大なプロジェクト、四国八十八ヶ所の鐘の音を使用した音楽で構成したアルバム「空海の旅」シリーズにライフワークとして取り組んでいる。



『空海の旅3』  
07年10月24日発売  
COCB-53674  
¥2940/コロムビア

宗教的な意味ではなく、鐘の音を聴きその音が心に響き自然に手を合わせるといふ行為がわき上がり癒されるという事ですね。現代においては鐘の音を聴くという状況が少なくなり、なりましたから、ぜひとも美しい鐘の音で構成された宇宙的スケールの音楽世界が展開される。本物の癒しの音楽である喜多郎さんのCDを聴き、そういう感覚を体感して欲しいですね。

「身近に起こる様々な事件やテロや戦争ばかりの世の中において、人の心に安らぎを与える音楽で、世界中の人に平和を訴えたいという思いを胸に今後も旅をしていきたいと思っています」

「源頼政」

〔みなもとのよりまで〕  
1104～1180  
〔長治元年～治承四年〕

◎利根川 清（早稲田大学高等学院教諭）

頼政挙兵——老将の死 誉れのままに死すこと——

治承四年五月、齢七十五（一説には七十七）の老将が切腹討死。

当時で七十に余る年齢といえば、現代ではほぼ九十過ぎにも匹敵するだろう。そうした老人が一族郎党を率い激闘奮戦の果て、諸共に討ち死にをしたのである。そう考えてみると、源三位頼政の挙兵とその死は、なかなか異様なことに思える。

頼政の三位という位は武士階級からすれば破格の地位である。また、その和歌の才能は世に広く知られるところであった。本来なら、そこまで上りつめ、世間の評価も十分である上は、当然身を退き、安閑たる立場にいたはずである。ところが、功成り名を遂げて無事人生を全うするはずの老人が、摂津源氏一門の存亡を賭して俄かに挙兵したのである。

歴史的に見れば、挙兵の目的は平家の専横を阻止するためと解釈するのが一般的である。「平家物語」巻第四「源氏揃」でも、以仁王に挙兵を勧める頼政自身が同様の目的をあげている。ところが「平家物語」は同巻「競」では挙兵の真相として、もうひとつの理由を描く。ことの発端は子息仲綱が所有した一頭の名馬「木の下」であり、そのやり取りが頼政の挙兵を決意させたというのである。頼政は屈辱を受けた子息仲綱にこう語る。「何事のあるべきと思ひあなづつて、平家の人どもが、さやうの痴れ事を言

ふにこそあんなれ。その儀ならば、命生きても何にかせん。便宜を窺ふてこそあらめ」、つまり、頼政は平氏に侮られた私怨ゆえに思い立ったのが真相とするのである。

現代では、私怨は公の論理と比較すれば下位に位置づけられるだろう。無論当時においても、そうした価値観は存在した。同巻「鶉」では、頼政の武芸の誉れを語りつつも、結びでは「由なき謀叛おこいて、宮をも失ひ参らせ、わが身も滅びぬるこそうたてけれ」と頼政の行動を非難する。では、頼政がわが身も一族も犠牲にしてまで守らなければならなかったものは何であったのだろうか。頼政自身の言葉を借りれば、平家に「思ひあなづられたこと」、つまり武士としての名誉を傷つけられたということなのである。現代に生きる我々からすれば、短慮に過ぎる狂人の判断とも思えるが、頼政にとっては「誉れ」を選ぶ判断こそが得心のゆくものだったのである。「源平盛衰記」では、頼政が死に臨んだ折、こう述べたという。「この時に命を滅ぼすと雖も、後世に名を留む。是れ勇士の願ふ所、武将の幸ひに非や」、この言葉には、己の誉れ、名に恥じない武将としての生き様を通じた誇りがある。「平家物語」はそこに描く人々の死に様を以て、我々が失ってしまったものを教えてくれる。この頼政の死もそのひとつである。

「平家物語の夕べ」秋季公演決定!

第十八回

平家物語の夕べ

日時…平成20年10月17日(金)  
18時30分(開演予定)

会場…日本橋劇場

チケット…A席 8,000円・B席 7,000円

●お問い合わせ・お申込み…原典「平家物語」を聴く会まで TEL 03-6673-3863(平日 10:00～17:00 土日祝 休)

三橋貴風 「祇園精舎」  
今藤政貴

豊竹呂勢大夫 「緒環」  
鶴澤清治

新内仲三郎 他 「経正都落」

今藤文子 「判官都落」  
今藤政太郎  
他

お詫び…平成20年5月29日、紀尾井小ホールにての澤村藤十郎舞台復帰に向けての特別公演「平家物語の夕べ」におきまして早々にチケットが完売し、公演を楽しみにしていた多くの方にご覧いただくことができず大変申し訳なく思います。心よりお詫び申し上げます。

# 情緒力はすべての基

橘 幸治郎 (原典「平家物語」を聴く会 代表)

「平家物語」は周知のごとく盲目の琵琶法師が、琵琶の演奏を混えて物語りするという芸能であった。この芸能は後世の演劇に多大な影響を与えたといえるが、「能」の演劇手法の根本を作った世阿弥もその影響を受けた一人であったろう。世阿弥が編み出した能の演劇手法である「複式夢幻能」が、「平家物語」にその題材の多くを得、恐らくは「平家物語」の作者やそれを語る演者が終局的に目指した「鎮魂」というテーマをその根本としていると思えるからである。

この「複式夢幻能」には、通常私たちが知っている演劇とは大きく相違する点がある。それは、通常の演劇が、事件が起こってから終焉するまでの顛末を語るものであるのに対して、この「複式夢幻能」では、事件が終わった後、事件に関わった人物（多くは亡霊となって現れる）の口から回想として語らせることである。様々な生涯を終えた死者たちが、彼らが死して

なお心に抱えたままの「怨嗟」「悔恨」「苦惱」等を、自らの言葉として語り出すことで、又、それを聴いてあげることで魂は鎮まる。また一方、それを聞く観客たちにとっては、人間の持つ不可避な業を知り、感じる貴重な経験となっていく。人が人の想いに至り、人の心や立場を理解する為の情緒ともなるのである。

この仕組みを世阿弥は「平家物語」の語りの中に見出し、能の根本手法とした。

このように世界に類のない「複式夢幻能」という演劇手法を持って存在する「能」が、世界遺産に指定され国際的な評価を得ている今日、私たちが世阿弥以前の原典「平家物語」に立ち返る意義は大きいと言わねばならない。原典「平家物語」を聴く会<sup>①</sup>で多くの演出をお願いした内池望博さんは常々、「演劇というものは役者が演じることで成り立っているが、役者が自分ではない第三者（他人）になり、その第三者の想いを語ったり感情を表現したりするの

だから、それは並大抵の行為ではない。役者には、「表現力」以前に、役の人物の心情を深く理解し想いを馳せる力がなければならぬ。これはいくら演劇論を勉強しても役者自身が人間的に情緒的に深く成長していなければ出来ないことである」と語る。さらに、「そもそも「演劇」というものが何故多くの人たちを感動させるのかといえば、役者が、演じる自分とは違う他人の心を完璧なまでに理解し感じ取って、表現し伝えるからである」ともおっしゃっている。

今の世に本当に必要なものとはいったい何なのか?…内池さんのこの言葉の中にヒントになるものがあるのではないだろうか。

現代はまさに末法の世。人の想いに触れない、入り込まない、斟酌しない人間、厚顔無恥・傍若無人な人間や、小事に姑息に立ち回る輩で溢れている。又、利益や効率ばかりを金科玉条にし、軽薄な経済理論を振りかざす人間も多い。

このような人間たちで社会が成り立ってしまっている。これも高度に経済成長してしまった社会の「終末相」なのだろうか。一体どうしてこんな日本になってしまったのか? 愁嘆の気持ちは尽きないが、その責任の所在は私たち一人一人に間違いなくあるのである。

これは私のいつもの言であるが、「芸能の持つ力は大きい」。一瞬にして人の心を動かして世を変える力がある。

琵琶法師という芸能者が語った「平家物語」まで、私たちみんなで遡ってみようではないか。五百年前に世阿弥が、様々な人生の不条理に弄ばれ苛まれた、様々な「人間の想い」に辿り着いたように!

そして思索の基と成す「情緒」というものを獲得したように!

ここまで来てしまった私たちの無責任社会を何とかする起死回生の案が、先人が残した日本の至宝ともいえるこの「平家物語」の中に存在するように私には思えてならない。



# 国宝『平家納経』

小松茂美

国宝「平家納経」は、「法華経」一部（八巻・二十八品。「品」は「章」の義）に「無量義経」（開経・一卷）と「観普賢経」（結経・一卷）、「阿弥陀経」（平清盛署名・一卷 および「紺紙金泥般若心経」（平清盛書写・一卷）に平清盛の「願文」（供養の由来を述べた文書・一卷）を添えて一具全三十三巻を、金銀の雲龍文様の金具を飾



【小松茂美（こまつしげみ）】

一九〇五年、山口県生。一九四二年、山口県立柳井中学校卒業。鉄道省に入り、柳井駅に勤務。一九四五年、広島で被爆。「平家納経」に魅せられ、学問の道に進む。東京国立博物館美術課長を経て、現在、センチュリー文化財団理事・館長。博士（文学）。柳井市名誉市民。『平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究』により日本学士院賞。「平家納経の研究」の完成を含む古筆学研究体系化の業績により朝日賞受賞。著書に、『後撰和歌集・校本と研究』をはじめ『日本絵巻大成』（正・続・続々）（全54巻）、「古筆学大成」（全30巻）、「小松茂美著作集」（全33巻）など。

った煮黒味銅（にぐろめり銅一〇〇に白銀三の合金。黒色が強い）製経箱に納めて厳島神社（広島県廿日市市宮島町）に奉納したものである。

「願文」によれば、長寛二年（一一六四）九月、権中納言・従二位平清盛（47歳）が安芸国伊都岐島社（厳島神社）に、一門の男性たちが結縁（縁を結ぶ）供養して奉納した次第を明らかにする。なぜに神に仏の教えを説く教典を奉納したのだろうか。

もともと、わが国固有の神道の神と仏教の仏菩薩とを同一視して、両者と同じところに祀って信仰する風習は、奈良時代（八世紀）に始まる。神仏混淆（神仏習合とも）の思想である。よって、神社の境内やその近くに付属する寺を建立して、神宮寺と呼んだ。やがて平安初期（九世紀）になると本地垂迹説がおこる。神は仏が世の人を救うために姿を変えて、この地に現れたもので、神仏は同体であるという。平安末期（十二世紀）から鎌倉時代（十三世紀）にかけては、すべての神社の本地仏が定められ、その思想は盛んとなった。明治元年（一八六八）十月に「神仏判然令」などを発布、その混淆が禁止されるまで、世紀を越えて永く神も仏も同じ

であるという観念であった。厳島神社の本地仏は大日如来とも、また観世音菩薩ともいわれてきた。

したがって、この「平家納経」が厳島神社に奉納されることは何らの不思議もないごく自然の信仰であった。桓武天皇（69歳）の勅命で仏法の修学のために渡唐した最澄（38歳）は、在唐八か月の後、帰国した。王城（京都）の良（東北）に位置する比叡山延暦寺に日本天台宗を開き、「法華経」を根本經典とした。たちまちにして、宮廷や貴族社会に法華経信仰が広まった。この「平家納経」が「法華経」を中心とする意義も、おのずから明らかである。

清盛の「願文」には、「平家一門の繁栄を謝し、この上は「来世の妙果」（死後における仏の果報）を祈って、清盛はじめ長男重盛（27歳）・異母弟頼盛（34歳）ら一族に郎等平盛国（52歳）ら加わって、「卅二（32）人、各一品一卷を分ち、善を尽くし美を尽くさしむる所なり」（各自が一卷ずつ分担して、美のかぎりを尽くして経巻を裝飾した）と記している。もともと、仏教信仰の功德の最上は写経とされていた。この写経というものは、亡者の追善（死後の成仏）のためと、当人の逆修（生きているうちに、あらかじめ成仏を祈る）という二つの善根のために行った。この「平家納経」は、後者の逆修供養であった。



国宝 厳島神社「平家納経」分別功德品 第十七(本文)



国宝 厳島神社「平家納経」葉王品 第二十三(見返し)